

【震災募金口座】 振替 00140-9-180881  
宗教学人日本バプテスト連盟総務部

＜福島の声＞「地震、津波、原発事故」の複合被災地 福島の今 東日本大震災被災地支援委員会 大島博幸（福島主のあしあとキリスト教会）

東日本大震災直後、福島県への思いは「がんばろう ふくしま！ Fight! FUKUSHIMA！」の全国からの声に後押しされて、支援が始まりました。震災後1年の2012年3月11日、県民投票で「ふくしまからはじめよう。Future From Fukushima」が発表され、そして震災から10年を機に福島県は、「はじめよう」から「実現する」を軸足に新スローガン、「ひとつ、ひとつ、実現するふくしま」を今年3月12日に発表しました。

しかし、その1か月後、政府は東京電力福島第一原発の汚染処理水を再処理のうえ海洋放出を決め、公表しました。「ひとりひとりの力を重ね、それぞれの思いを繋ぎ、ともに、ひとつずつ、しっかりと、カタチにし続けていこう」との新スローガン発表直後のことでした。汚染処理水の処分方法は、2020年2月に国の有識者小委員会が「海洋放出が優位」と報告、それに沿って国は方針を決めました。これまで十分な話し合いも説明もないため、漁業関係者はもとより多くの県民、県内外の各市町村議会でも反対表明や決議が続いています。

振り返れば2015年、東京電力は福島県の漁業関係者に対して「汚染水を放出することはない！」と約束しました。漁業者は10年間、試験操業と検査を繰り返し、この4月からようやく全魚種の出荷制限が解け、原発事故以前と同じ操業への移行期間に入ったばかりでした。一方、全町民避難を強いられた原発立地の大熊町と双葉町は、住民の帰還の足かせとなる原発敷地内のタンクにたまり続ける汚染処理水の長期保管に対し、早期処分方法を決定するよう国に求めています。大熊町と双葉町は、原発事故処理に伴う大きな負担を二つ受け入れています。一つは汚染土や汚染廃棄物などを保管する「中間貯蔵施設」。もう一つは増加する汚染水対策として、地下水を汚染前にくみ上げて海に流す「地下水バイパス計画」です。どちらも原発事故処理を進めるために必要と理解されますが、風評被害や心理的苦痛が大き

いのも確かです。それは、汚染処理水の海洋放出によって直接被害を受ける漁業関係者も同じです。漁業関係者や原発立地の住民の方々の、負担させられる側の思いを理解しない原発事故処理は、限界にきているのが現状です。

「地震、津波、原発事故」の複合被災地福島の復興は、震災後10年という時間の区切りだけでは解決できません。現在も「原子力緊急事態宣言」は発令中です。去る2月13日の福島県沖を震源とする震度6強の地震により、第一原発1号機では、原子炉格納容器内の冷却水水位が1mを下回り、計測不能となり、毎時3トンの注水量を毎時4トンへ増やしました。循環しているとはいえ、高濃度の汚染水が発生し続けています。

福島の復興はこれからです。今後、原発廃炉作業によって高い放射線量の廃棄物処理が生じ、またどこかに大きなしわ寄せが行くこととなります。福島に住み、福音に生かされる者として、誰とどう生きるかが、いつも問われます。お祈りください。



＜左＞国道6号からの第一原発への入り口



＜右＞中間貯蔵施設の一部



＜左＞津波に襲われた浪江町請戸地区の現在



＜右＞新しくなった浪江町請戸漁港

＜現地支援委員会から＞震災と震災の間を生きる者として

委員長 金丸 真（仙台長命ヶ丘キリスト教会）

「東日本大震災から10年」という今年は、東日本大震災を思い出させるような大きな地震が、東北で相次いで発生しています。2月13日(土)23時7分には福島県沖で最大震度6強、3月20日(土)18時9分には宮城県沖で最大震度5強、5月1日(土)10時27分には宮城県沖で最大震度5強、その他、震度4クラスの地震は今年に入って6回も発生しています。

その度に、何とも言えない精神的なダメージを受けるだけではなく、私たちが訪問支援を継続している石巻市牡鹿半島や巨理町の方々をはじめ沿岸部にお住いの方々は、度重なる地震で津波が発生するのではと毎回恐怖を感じています。

私が聖書の授業を担当している宮城学院中学校・高等学校では、授業中に「ゴーーー」と地鳴りが聞こえ始めると、身をこわばらせて「もういやだー！」と耳をふさぐ生徒もいます。そして何よりも、原発事故発生から10年が経過しても未だに原子力緊急事態宣言が解除されていない状況にある今、地震が起こるたびに、原発の状況がとても心配です。良くも悪くも、大きな地震に慣れてきているところもあり、改めて気を引き締めなければと思いますが、気を引き締める前に、心が折れてしまうような感じもあります。例えば、宮城県沖で最大震度5強の地震が発生した3月20日(土)は、ちょうど「東日本大震災から10年 祈りとシンポジウム」を開催した日でした。震災から10年の歩みを振り返って祈りを共にした、その日の夕方に震度5強の大地震が発生したのです。その瞬間、私は「またか」という疲労感と脱力感に襲われました。

これらのことで、思いを新たにしたのは、私たちは「震災後」を生きているのではないということです。私たちは、震災と震災の間を生きているという自覚がなければいけないと思います。残念ながら、東日本大震災後も熊本をはじめ様々な場所で、大きな震災が起こっています。そして、これからもまた大きな震災が起こる可能性が高いと言われています。どこで何が起こってもおかしくないのです。私たちは震災と震災の間を生きており、さらには新型コロナウイルスの危機下にあります。今まで当たり前だったことが揺さぶられる中、これからも想定外のことが起こりえることを心に留めておかなければいけません。そのような今だからこそ「共に生きる」ということを一緒に考え続けていきたいですし、篤い祈りでつながっていきたく願っています。

↓写真は3月6日(土)牡鹿半島訪問支援時の集合写真



2020年度震災募金

3,552,459円（目標400万円）

ところから感謝申し上げます。

2020年11月～2021年3月の献金者

調布、TRINITY BELL CHOIR、市川八幡、八幡、福岡南、宮崎、大分、大村古賀島、調布、東福岡幼稚園、相浦光、豊中、学校法人光の丘幼稚園、福岡、北大阪、東京第一、神戸、西南女学院、久保祐子、那覇新都心、宝塚、逗子第一、伊集院、静岡、川越、仙台長命ヶ丘、三島、神愛幼稚園、調布、神戸、浜松、伊都、学校法人西南学院、小倉、日立、前橋、浦和、恵泉、東北連合女性会、福岡、シオン山幼稚園、学校法人西南学院、東京北、飯塚、調布、福岡城西、筑紫野南、港南めぐみ、久保祐子、清水栄光、筑紫野南、福岡有田、山梨、日本バプテスト福岡地方連合女性会、大村古賀島、久保田君代、所沢、富士吉田、防府、山形、長住、瑞穂、福岡城西、シオン山、古賀、川越、伊集院、人形げきや おたこ組、豊中、藤沢、久留米荒木、東山、大分、岡山、那珂川、南光台、大井、西川口、伊丹、調布、相浦光、高崎、福岡、別府国際、大宮、豊橋、市川八幡、花小金井、久留米、鳥飼、恵泉、相模中央、那覇新都心、伊都、志村、赤塚、香住ヶ丘、福岡南、八代、神戸伊川、百合丘